



〈学生研究奨励費成果報告〉

本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と字母研究……………	2
女性の生活に健康的な一選択肢を提案する……………	3
～ヴィーガン菓子をを通して～	
大学生活を快適に過ごすためのアプリ開発……………	4
相互構築的な学びの考察……………	6
— オンライン学習支援の活動を通して —	
地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生……………	7
— 参加学生の自己成長の視点から —	

211A1 本学図書館所蔵「源氏百人一首」の翻刻と字母研究

古典文学研究会は、「近世期において『源氏物語』がどのように享受されていたのか」、「『源氏物語』の和歌がどのように解釈されていたのか」、「版本においてどのような文字が使用されていたのか」の三つの疑問点を明らかにするために、昨年度に引き続き本学図書館所蔵の『源氏百人一首』を研究してきました。

『源氏百人一首』は、黒沢翁満により執筆され、天保10年(1839)に刊行された『源氏物語』の和歌の解説書です。著者の黒沢翁満は江戸後期の国学者で、本居宣長の門弟でした。本作品は『源氏物語』の登場人物が詠んだ和歌を一首ずつ選出し、上段に人物と和歌の解説が、下段に人物名と和歌が書かれた構成になっています。本作品は「百人一首」と題していますが、実際に取り上げられている人物は123人と矛盾している点もとても興味深いです。また、取り上げられている人物を見ても、光源氏や明石入道といった主要人物以外に霧籬女といった端役も選出されており、作者の源氏物語に対する深い知識が窺えます。

今年度の古典文学研究会は、昨年度から引き続き、『源氏百人一首』の翻刻を行うのと並行して字母研究も行いました。前期はコロナウイルスの影響により、翻刻作業が中心となってしまいましたが、後期は対面での活動が可能になったことで字母研究にも着手することができました。

今年度の研究の結果、作者は同じ場面と同じ字を使用するとき、意図的に字母を変えている可能性があることが分かりました。例えば明石入道の和歌に登場する「ひ」についてです。4行目「思ひ」の「ひ」の字母は「飛」を字母としていますが、6行目「さびしさを」の「び」は今私たちが使用している「ひ」と同じ「比」を字母にしています。この複数の字母の使い分けも、『源氏百人一首』の特徴であり、興味深い点です。

また、解説文においても作者独特の言い回しで書かれている時があることが分かりました。例えば37オの藤原惟光の解説文です。藤原惟光とは源氏の乳兄弟という関係にある腹心の家来です。源氏の須磨退去にも同行し、今回の37オの歌もその時詠まれた歌になっています。上記で説明した通り、藤原惟光は家来ですので普通なら惟光を説明するときには敬語を使用しません。しかし、惟光の説明が書かれている上段4行目には「源氏の殊に親しく召使ひ給ふ」と敬語が使用されていることが分か

ります。この疑問について部員同士で検討した結果、この敬語は実は源氏に対して使用されているのではないかという結論に至りました。つまり、「源氏が雇っている」という意味で敬語が使用されているのです。この言い回しからもわかる通り、作者独特の言い回しも本作品の魅力の一つではないでしょうか。

以上のように研究を進めた結果、明らかになったものがある一方、今後の課題もいくつか見えてきました。

一つ目は「霧籬女の配置について」です。霧籬女とは若紫巻で光源氏が密かに通っている女を指します。本作品に選ばれた歌も、源氏が若紫の所から帰る途中、女の家を過ぎる際に詠んだ歌の返歌です。しかし、霧籬女(35オ)の前後に注目してみると、前首(34ウ)は王命婦の歌で、この歌は賢木巻で詠まれているものです。後首(35ウ)は麗景殿女御の歌になっていて、この歌は、花散里巻で詠まれたものです。歌われた巻名に注目すると、霧籬女が詠んだ歌の巻である若紫巻だけ、配列がおかしいことが分かります。今まで作者は巻順ごとの配列にしている傾向があったため、霧籬女の配置には違和感を覚えます。この配列が作者のミスであるなら良いのですが、もし作者の意図的な配置であるならば、配列についても今後調査・研究していく必要があります。この疑問点について今期では結論が出せず、また、発表会でも議題に挙がった話題ですので、来年も調査を続けていきたいと思っています。

二つ目は発表会でご指摘いただいた「人物選出」についてです。前にも説明した通り、本作品では主要人物から一端役まで様々な人物が選出されています。ある程度翻刻が進んだ時には、作者の人物選出についても調査・研究を行っていただければと思っています。

来年度の活動では、翻刻作業に留まらず、作品自体についての調査・研究も行っていきたいです。また、今期に引き続き字母研究のほうも並行して行っていただくと考えています。そして、当初の目的でもある「近世期において『源氏物語』がどのように享受されたか」、「和歌の解釈」、「版本における文字の調査」においても研究を進めていきます。

(文責：飯田)

(代表：飯田希栄／齋藤葵 中島玉貴 進実来 工藤京子／助言者：今井久代先生 光延真哉先生)

女性の生活に健康的な一選択肢を提案する ～ヴィーガン菓子を通して～

1. 緒言

ストレス社会と呼ばれる現代、多くの人がストレスを抱えている。我々がこれまでに東京女子大学学生を対象に実施した調査によると、通学中に「疲労感を感じる」など、多くの女子大学生はストレスを抱えており、ストレス解消に役立つサービスの提供が急務である。

ストレスの解消やリラックス効果が期待できる食品として、我々はヴィーガン菓子に着目した。元々ヴィーガン (Vegan) とは、ヴィーガニズムを支持、実践する人たちのことである¹⁾。ヴィーガニズム (Veganism) とは完全菜食主義とも呼ばれ、動物に苦しみを与えることを嫌い、動物の肉、卵・乳製品、蜂蜜を食べず、動物製品を身につけたりせず生きるべきとする主義を意味する²⁾。本研究において「ヴィーガン食品」ないし「ヴィーガン菓子」とは、ヴィーガンが制限している材料を一切使用していない食品や菓子のことである。

ヴィーガン食は食物繊維やビタミン、鉄、植物由来化学物質が多く、飽和脂肪酸やコレステロールが少ないため、長期摂取で心血管疾患³⁾、肥満³⁾、糖尿病³⁾への有益な効果やメンタルヘルス改善⁴⁾が報告されている。さらに事前の意識調査で女子大学生は「ヴィーガン」という言葉にかなり馴染みがあることがわかった。このため、ヴィーガン食品は身体への負担が少なく、女性の健康的な生活に寄与すると考えた。

しかし、ヴィーガン菓子摂取による女子大学生の精神的ストレスへの効果は明らかにされていない。そこで本研究では、「ヴィーガン菓子摂取は女子大学生の精神的ストレスを軽減させるか」を検証することを目的とした。

2. 実験方法

2.1 被験者

被験者は東京女子大学の20歳～22歳の女子大学生7名であった。実験参加者全員に研究概要について説明し、同意を得た上で実験を行った。

2.2 実験菓子

ヴィーガン菓子には「45% ナッツミルクバトン-ヴィーガン (HOTEL Chocolate)」4gを非ヴィーガン菓子には「40% ミルクチョコレートバトン (HOTEL Chocolate)」4gを用いた。

2.3 実験プロトコール

実験はヴィーガン菓子摂取群 (ヴィーガン群) と非ヴィーガン菓子摂取群 (非ヴィーガン群) の間を約1週間空けたクロスオーバー試験とし盲検法を用いた。被験者は10分の安静の後、ストレス負荷前測定として生理的ストレス評価法である唾液アミラーゼ活性測定、心拍数、血圧測定と、心理的ストレス評価法であるPOMS2質問紙調査を行った。30分の内田クレペリン検査の

計算作業によるストレス負荷の後、ストレス負荷後測定として負荷前と同じ項目を測定し、その後実験菓子を3分間で摂取した。菓子摂取後に摂取15分後測定、摂取30分後測定を行った。菓子摂取直後には主観的評価アンケートを実施した。本研究では実験菓子摂取や唾液測定を行うため、新型コロナウイルス感染防止対策を行った上で実験を実施した。

3. 結果

心理的ストレス評価では、ヴィーガン群および非ヴィーガン群においてストレス負荷前、負荷後、菓子摂取後では、どのタイミング間でもPOMS2の全ての気分尺度において有意差が無かった。

生理的ストレス評価では、心拍数はストレス負荷後にほとんど変化しなかった。ストレスが高いほど高値となる唾液アミラーゼ活性は、ヴィーガン群ではストレス負荷後に比べ菓子摂取後に減少傾向であったが、非ヴィーガン群では変化がなかった。血圧は、両群の最高/最低血圧とも、ストレス負荷前に比べて負荷後に増加する傾向であった。しかし、ストレス負荷後の菓子摂取30分後では、非ヴィーガン群では血圧が上がったままだが、ヴィーガン群では血圧は低下し、群間比較においてヴィーガン群は非ヴィーガン群に比べ有意に血圧が低下していた。

4. 考察

本研究の結果、単回のヴィーガン菓子摂取により、ストレス負荷後の血圧が非ヴィーガン菓子摂取に比べて有意に低下することが明らかになった。日常のヴィーガン食品という選択肢は、アレルギーや主義趣向等、多様な価値観が共存する環境作りにつながると思う。今後は、被験者収集方法や菓子選択等、実験方法の改善を検討する。

5. 結論

本研究では女子大学生を対象に、ヴィーガン菓子摂取の精神的ストレスへの影響を生理的・心理的評価法を用いて調査した。その結果、単回のヴィーガン菓子摂取によりストレス負荷後の血圧が低下することが明らかになった。ヴィーガン菓子は、女子大学生のストレスを緩和する効果が期待できる。

6. 謝辞

本実験にご協力いただいた被験者の方々、コミュニケーション専攻オフィス、保健室の先生方、筆者らの考えを受容れ熱心なご助言を下さった藤田恵理先生に心より御礼申し上げます。本研究は東京女子大学学会による学生研究奨励費により行われた。

7. 参考文献

1) "Definition of Veganism." The Vegan Society (英国ヴィーガン協会) HP (<https://www.vegansociety.com/go-vegan/definition-veganism>)
 2) "History." The Vegan Society (<https://www.vegansociety.com/about-us/history>)

3) Lopez PD, et. al. Am J Med. 132 : 875-883.e7, 2019

4) Iguacel I, et. al. Nutr Rev. 79 : 361-381, 2021

(文責：磯貝)

(代表：磯貝美和／菅原碧記 土門愛実 佐藤悠／
 助言者：藤田恵理先生)

21 I A3

大学生活を快適に過ごすためのアプリ開発

1. 本研究の目的

私たちは今までとは違う困難に見舞われたコロナ禍の大学生活を過ごしている中で、大学生活の指針となるアプリを開発することを考え、学生研究奨励費に応募した。

学生の声も聞きながら、大学生が今本当に必要としているものについて明らかにし、アプリを作るだけでなく実生活に役立つ物づくりとは何なのか、考えることが今回の研究活動の目的である。

2. 調査結果から分かること

夏休みを利用し、主に大学生を対象に Google Forms を用いて時間割アプリやコロナ禍の大学生活についてどのように思っているのか、調査をした。

リモート授業時に困っていたことについて尋ねてみると、主に2つ大きな問題が浮上した。

- ① コロナの影響でリモート授業になり、友人ができない
- ② 自分のスケジュールと大学のスケジュールをまとめられる時間割アプリが欲しい

この結果から、顔を合わせずとも安心かつ気軽に会話ができる学内者限定の SNS を作ることを考えた。また時間割にこだわらず、カレンダーにした方がプライベートの予定と大学の予定、授業時間の設定がスムーズにできると考えたため、アプリ内にカレンダー機能をつけることにした。他にも私たちが必要と感じたツールを搭載している。多くの人が使えるように、iPhone 用のアプリと並行して、Android 用のアプリも作成した。

3. 開発環境

iPhone 用アプリの開発は XCode で行い、開発のしやすい Storyboard で作業した。Android 用アプリの開発は Android Studio を用いて行った。また SNS についてはこれらとは別に、iOS、Android、どちらとも動くよう、Rust で Web アプリを開発した。

4. アプリ機能の説明

・カレンダー

カレンダーについては試行錯誤し、iPhone では FS Calendar を、Android 版では Calendar View を使い、独自のカレンダーを作ろうとしたものの制作が思うようにいかな

かったことから今回は既存のものを使うこととした。東女生は全員大学の Google アカウントを持っていることから本アプリでは Google Calendar を活用している。

今回は力不足で独自のカレンダーを開発することができなかったため、より学生に合ったカレンダーを開発することは今後の課題である。

・WebClass、CampusSquare

それぞれログイン画面にアクセスできるよう、ボタンをつけた。どちらも本学で学ぶ学生にとって、なくてはならないツールである。

・バス時刻表、運行情報

東京女子大前を発着するバスの時刻表が表示できる。大学付近の道は混雑することが多く、バスが時間通りに来ないこともあるため、時刻表だけでなく接近情報が表示できるボタンもつけた。

・マップ

Study For Two さんの作成されたキャンパスマップについて許可をいただき、アプリ内で表示する機能をつけた。

・SNS

コロナ禍の大学生活では対面授業が少なかった分、SNS を通じて友達を作っている人も多くいた。しかし、好ましくないアカウントからの接触もあり、学生たちは安心できないまま SNS を続けている現状がある。安心して人間関係を構築できるよう、利用者を学内生に絞り、所属を明らかにした SNS の開発に取り組んだ。

最終目標は、中央集権型のシステムで実現されている SNS 上の機能を、投稿自体に持たせるようなデータ構造と通信経路を確立することだ。必要な項目としては、投稿が正しい順番で並んでいるかの順序性、投稿が全て揃っているかの網羅性、投稿が誰によってなされたものであるのか、投稿が改ざんされたものではないか、投稿の検索機能があること、の5つだと考えた。順序性と網羅性においてはブロックチェーンのデータ構造を、投稿者の確認と改ざんされたものではないかの確認は電子署名を用いて実装した。投稿の検索、アカウントに相当する秘密鍵は個人の端末側で行うものとした。

5. デザインについて

メインカラーは大学の窓やドアなどに使用されている、エメラルドグリーンを基調に設定した。また、本館と図書館にあるステンドグラスとチャペルにあるレリーフのイメージ画像をアプリ用に作成した。学生のニーズに合わせて、目に入りやすい位置にカレンダーとCampusSquareのボタンを配置した。

6. 今後について

このアプリはデザインや紐づける URL を変更すれば、他の大学や学校でも使用できるものになっている。アンケートは他の様々な大学の人にも協力いただき、他大学でも本学の学生と同じようなことを問題と思っている大学生がいることがわかったため本アプリを今後運営

するにあたって需要はあると考えている。独自のカレンダーや独自のシステムが構築できるようにこの一年間の学びを糧にし、今後も自主的に勉強していきたいと思っている。今回の研究活動を通して実生活に役立つものづくりとは、利用者の声を聞き、現状の問題点を探った上で自分達の知識や時間の許す限りで作り出すことだと実感した。私たちの大学生活は始まったばかりだが、早い時期にこのような機会をいただき、仲間と研究ができたことは、今後の学生生活や社会人になってから活躍する上でも大変勉強になった。

(文責：黒瀧)

(代表：黒瀧かれん／鈴木弥映 早川美穂／

助言者：萩田武史先生)

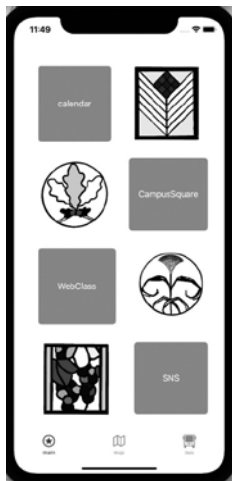


図1 メニュー画面



図2 マップ画面



図3 バスの時刻表表示画面



図4 SNS画面

相互構築的な学びの考察 — オンライン学習支援の活動を通して —

1. はじめに

現在、在日外国人児童生徒数は約28万人で、そのうち日本語指導が必要な児童生徒は約5万人いると言われている。文部科学省によると、日本語指導が必要な児童生徒とは、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒、もしくは、日常会話ができても学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒」のことである。日本語指導が必要な児童生徒は年々増加しているが、支援体制は十分に整えられていない。そのため、日本語指導が行き届いていない児童生徒が多く在籍していることが、現在大きな問題となっている。

本研究のメンバーは、日本に暮らすムスリムの小中学生を対象としたオンラインでの教科学習支援（以下、学習支援）の活動に参加している。学習支援は2020年6月に日本語教員養成課程の履修生が始めた。2022年10月現在、20名の学生と6家庭11名の子どもたちとともに活動を行っている。学習支援では、主に学校の宿題を行ったり、苦手科目の学習を進めたりしているが、この活動は子どもたちが教えられる対象で、子どもたちだけが学ぶのではない。学習支援のメンバーひとりひとりが、この活動を通して様々なことを学び、成長している。

本研究では、学生と子どもたちとのあいだで、どのような相互構築的な学びがあるのかを分析し、考察する。分析には、毎回の学習支援後に記入している「学習の記録」を用いる。

2. 「学習の記録」について

学習支援では、家庭ごとに「学習の記録」を作成し、学生間で共有している。担当の学生は、その日の学習内容、子どもたちの様子、学習支援の進め方などを記入し、次回の学習開始前に前回までの記録を確認するようにしている。

今回、学生と子どもたちとの相互構築的な学びを考察するために、「学習の記録」に新たに「学生の学び」という項目を設けた。学生が自身の学びを言語化し、それを記録として残すことで、学生の学びと成長につながると思ったからだ。「学生の学び」には、教科サポートで工夫したことや、子どもたちとの会話で気になったことなどを記入している。

3. 「学習の記録」の分析・考察

「学習の記録」にある「学生の学び」の項目を分析した結果、学生と子どもたちとの相互構築的な学びについて以下3点のことが明らかになった。

1点目は、学習の進め方についてである。学習支援は、所謂「塾」のような場ではなく、先生と生徒の関係でもない。学生も子どもたちともに学び合う場である。

そのため、学生は決められたことだけを教えるのではなく、どのように学習を進めたら良いのかを活動を通して学んでいく。また、子どもたちは、学校や家庭以外の場で学習する機会がほとんどないため、この活動を通して、自分なりの学習スタイルを確立していく。このような過程のなかで、学生と子どもたちが相互にコミュニケーションを取り、試行錯誤しながら、子どもたちひとりひとりに合った学習スタイルを見出していくことは、ともに学び合っている証であると考えられる。

2点目は、学生と子どもたちの成長である。学習支援中、子どもたちが次第に質問をしてくれるようになったことに対し、子どもたちの成長を感じている学生が増えている。子どもたちがわからないことを「わからない」で終わらせるのではなく、具体的な質問ができるようになったのは、子どもたちの成長である。一方で、このような子どもたちの成長が見受けられたのは、学生が子どもたちから質問を引き出すようにしたり、子どもたちが質問をするまで待っていたりなどの工夫ができるようになったからだ。つまり、学生も子どもたちとともに成長していると言える。このことは、相互的な成長であり、学びであると考えられる。

3点目は、子どもたちと学生、親と学生の信頼関係の構築である。学生は、子どもたちと親からそれぞれ学校のことや勉強のことについて相談を受けることがある。これは、子どもたちや親が学生に話したいと思ってきているからであり、子どもたちと学生、親と学生それぞれに信頼関係が構築できているからこそであると考えられる。学生は、子どもたちや親からの相談を単に受け流すのではなく、しっかり受け止めて対応している。そのため、相談すること、話を聞くことがお互いの学びになり、子どもたちと学生、親と学生の間で、信頼関係が構築できていると考えられる。

4. おわりに

以上が学習支援における「相互構築的な学びの考察」の結果である。この結果からもわかるように、学習支援の活動は、先生と生徒の関係ではなく、また、学生が子どもたちに勉強を教えるだけの活動ではない。現在、日本語教員養成課程を履修している学生も日々学びながら活動に取り組んでいる。今回の考察で明らかになったことは、学習支援の活動を継続するうえで非常に重要なことだと考える。今後も新たな学びや発見を得ていきながら、毎回の学習支援の時間を大切にしていきたい。

(文責：五嶋)

(代表：爲国結莉恵／岡田菜央 木俣莉子 五嶋友香
鈴木詩菜 爲国結莉恵 能町知芳／
助言者：松尾慎先生)

地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生 —参加学生の自己成長の視点から—

1. はじめに

現在、日本では在留外国人数が増加傾向にある。昨今、日本に暮らす外国人住民との共生が注目されるなか、外国人住民と日本社会をつなぐ存在のひとつとして「地域日本語活動」がある。

本研究のメンバーは、東京都新宿区高田馬場において任意団体「Villa Education Center」が実施する日本語活動（以下、VEC）に参加している。VECでは、毎週日曜日の午前10時から正午の2時間、「やさしい日本語」で書かれたニューストピックについて、ミャンマーやパキスタン出身の参加者とお互いの意見を交換したり、議論したりし、学び合う活動を行っている。本学の松尾慎先生をはじめ、大学院生や卒業生がファシリテーターを務め、毎回の活動テーマを決めたり、活動をデザインしたりする役割を担っている。この活動では、「先生」や「支援者」ではなく、進行役を意味する「ファシリテーター」と呼んでいるが、これは、「教える人と教えられる人」のように関係性を固定せず、対等に学び合うことを意味している。

本研究では、地域日本語活動が、外国人住民がことばを学ぶための場だけではなく、参加するすべての人がともに成長できる場としての可能性を持っていることを明らかにすることを目的としている。地域日本語活動を通して、参加者同士が知り合い、対話することで、双方が成長し、対等性を保った多文化共生社会につながると考える。

2. 地域日本語活動における自己成長

地域日本語活動における自己成長に注目する際、「日本語教師養成の場としての成長」と「豊かな個人としての成長」の二つの観点から考察する。

「日本語教師養成の場としての成長」とは、日本語教育を学ぶ学生メンバーが、VEC日本語活動という実践の場で活動デザインや教授法などを学び、自身の教授活動を内省、そして改善していくことができるということである。

また、「豊かな個人としての成長」とは、VECに継続的に参加し、ミャンマー、パキスタン出身参加者やさまざまなゲスト参加者との対話を通して、自身の知識や考えを深めるということである。

以上の二つの観点から、地域日本語活動における学生参加者の自己成長を考察していく。

3. 自己成長について

VECに参加している学生の自己成長について、二つの観点から述べる。

一つ目は、日本語教師養成の場としての成長である。VECに参加する学生は、まずはゲスト参加者として参加し、複数回の活動参加を通して、ファシリテーターと

して役割を担うようになる。ゲスト参加者を含め、すべての参加者に「役割」があるが、ここで述べる役割とは、活動をデザインしていく上での役割である。ニュース本文の語彙説明や映像視聴の際の補足説明等が役割にあたる。学生は、継続的な参加を通して、役割の変化を実感する。さらに、参加者ひとりひとりに合ったサポートを意識するなど、段階を踏んで一歩ずつ日本語教師になるため成長していく。

二つ目は、豊かな個人としての成長である。毎回の活動で取り上げるニューストピックについて、さまざまな背景を持つ参加者が互いに対話することによって、個人で学ぶよりも深い学びを得ることができる。

例えば、ヤングケアラーについてのニュースを読んだ回では、ヤングケアラーはかわいそうと言う学生参加者に対して、ミャンマー参加者は「日本人はこういうものを見て『かわいそう』という気持ちになるけど、それでその人の人生は終わりとは思わない。一人ひとり違うという気持ちを持って、自分を信じて頑張れば、ヤングケアラーにも未来があると思う。」と発言した。このような対話を通して、同情することも大切だが、それだけで終わりにしてはいけないこと、「かわいそう」と言うことは、自分とその人を線引きしてしまうことにもなること、ヤングケアラーが社会で活躍できるように、社会のほうアプローチ方法を変えることが必要だということ学んだ。

以上のように、参加者同士の対話を通して、日本社会のあり方について考えるきっかけが生まれている。毎回の活動参加から、少しずつ豊かな個人へと成長していることが感じられる。

4. おわりに

これまで、わたしたちは「学習者」だけでなく「支援者」にも学びがあるということ認識しつつも、具体的な学びの内容を分析、言語化してこなかった。本研究でVECに参加する学生メンバーの自己成長に焦点を当てて考察したことにより、地域日本語活動が外国人住民がことばを学ぶための場だけではなく、参加するすべての人がともに成長できる場としての可能性をもっていることを明らかにすることができた。

VEC日本語活動は「すべての参加者」にとっての学びの場であり、その「学び」は一人ひとり異なる。これこそが、VECにおける学びの特徴である。このような地域日本語活動という学びの場において、お互いが知り合い、対話することで、双方が成長し、対等性を保った多文化共生社会の実現につながると考える。

(文責：西村)

(代表：西村愛／北中伶奈 瀧谷こはる 東樹美和／
助言者：松尾慎先生)

